光

第三十五輯

大正十三年十一月

◇一燈園の家風……………………西田天香

◇十輪堂の松風を聽きて……………安藤州一

同人　懺悔報恩の奉仕者
祈願　不二の光明によれる生活
費用　供養されたる淨財

◇鹿ケ谷より……………………れんしや

◇東京一燈園のこと………………敬偉無

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆俱成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは箇中の消息、もさよく言辭の髣髴し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絶し、以て齊家、治國、平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

一燈園の家風

西田天香

宗教的に表しますと清規と云ひます。規則のことです。それを家風と申しますのは、道元禪師の言葉によつたのです。規則といふと堅くなりますが、もし他からそんなにしてよろしいのですかと言はれた時、『はい家風ですから』と答へれば穩かです。あまり際立つのもよくない。とにかく主張しないのです。親鸞上人の言葉に『またく往生に於て善もたすけとならず、惡もさはりとならず云々』と言ふ事があります。一つの事にも、それ程練つて行かねばならぬ程、世間は複雜でもあります。此の家風は何を參考にして生れたのでもありません。書物一つ調べたのでもなく、忽然として湧き出たのです。生れて二十餘年、貧弱ながら內へはいれば皆お光に惠れた感じが盛られてゐます。

臺灣へ行く時、同人の主な方達に、私が死んだと思ふて、其の後の事を一度考へて見て下さい、と賴んで行きました。留守中にいろ〳〵な問題を隨分練つておいて下さいました。その記錄を讀みますと、同人の方の考へも私の考へも、大體、一つでありました。うれしい事だと思ひました。い

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

つか家風が一つになつて居る爲め、考へ方も、また、言はず語らず、自然に一つになつてゐた事と思はれます。前の生涯なら、大勢が寄れば結論は合はぬ勝ちのものです。光の流れが、知らず識らず家風になつたのです。此の生活から深い體驗を得やうとせられる方は、この家風によるのが、早く行けるやうに思はれます。

生れた初めは家風といふやうなこともなかつたのです。只、ぢつとやつてゐました。一人なら只やつて居ればよいのですが、大勢になると家風が出來て來ます。自然それが必要になるのでせう。釋迦も始めは戒律を立てなかつたが、敎團が大きくなると、いろ〳〵の亂れも出ますので、戒律がだん〳〵に出て來たのです。自然のまゝの生活と知りながらも、道の行じ難さや、大勢の中には異た行き方の人なぞもありなぞすることから、細いことにも氣を付けねばならなくなります。或る意味に於ては、これは哀しいことです。法は只三條に止まるといふやうな言葉もありますが、大勢になると、やむを得ません。また、よく見詰めると、家風が判然するほど、立ち場が鮮かになります。妙心寺は四代目まで規則がなかつたのですが、四代目になつて、朝早く勤行して、摩訶般若波羅密多心經といふて、鐘を打つた。四代目の僧は之れを家風にしやうとおもふてしたのです。その鐘の音が、門に居る門番の所まできこえました。門番は『妙心寺もこれで下りだ』といふた話が傳はつて居ります。この門番は偉い識見があつたのです。即ち三昧を缺いて來たことを知つたので

す。初代寒山は弟子は一人しかなかつたと言ひます。みなついて行けないのです。あまりに根底の方を行つた人ですから。夢窓國師や空也上人は還相の往き方です。縁に應じ、機に應じたのです。寒山は家風なぞ作る時もなかつたのです。家風は必らずしも誇るべきものではない。からだそのまゝ、家風にはまつて、ずん〳〵行けばよいのですが、集まれば餘儀なく出來る。もし道人の強い者のみでしたら、かうした家風を作つて、縛られることはないわけです。

一燈園では、よく黑の筒袖を着ます。活動的ではないが、一寸道服と言つた感じもあり、偶然か暗示か捨て難い味もあります。聖德太子は深く佛敎に歸依しながら、或は政治に或は實業に携はられ、僧と俗との中間を行かれました。一燈園の黑い筒袖は道服にもなり、勞働服でもあり、中間を行つて得る形です。之れに執着しては危いことになる。

一燈園では維摩經を讀みます。此のお經は、わざ〳〵一燈園生活のために書いておいてくれたのではないかと思ふほど、よく此の生活を說いてくれてありますので、正依の經といふやうな形で皆が諷誦するやうになりました。私達の道場は托鉢さきであります。師匠は維摩居士で、行履は維摩經であります。からだで每日經を讀み、師匠が每日ついてゐるわけで、道場はそのまゝそこで道場であります。世間では金看板をよろこびます。それで方便に寺院なぞでは飾り立てもするのです。何の自覺もなくて、只、金看板を持てはやすのが世の常です。默つて、根本の處に立つて、何の色

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

もないのが本當でも信者が安心しません。看板をかけねば見る人がないのです。各宗の開山祖師方も、道に立つた初めは、こんなことからでも、隨分御苦勞されたことです。外の飾りがつき出すと、內容が空虛になり勝ちです。一燈園は成る可くさうした飾りや看板はない方がいゝ。もし一燈園の莊嚴は、看板はときかれたら、それは托鉢であつて、托鉢先きが道場、師は維摩、經は維摩經です。每日拜んでゐますこゝの維摩の像は、元同人で酒癖の惡い人でしたが、ある時血書して酒を斷ち、この像を造られました。私ももう長いこと拜んで居りますが、まことに落ちつきのよい、見飽のせぬ維摩さんです。園のみなさんも亦これが落ちつくといふてゐられます。

また、この建物を一燈園の所有かときかれる人がありますが、これは一燈園のではありません。一燈園のであつてはならぬ。只、路頭に立てる同人が集りに用ひるだけのこと、路頭の生活をお互ひに硏究するため、こゝに集つてはまためいめいの托鉢先きへ歸るのです。預つて居るのは宣光社で、一燈園は使はせていたゞくだけです。從つて、こゝでは、原則としては、御飯も炊いてはならないのです。當番と病人とのために炊かせていたゞくので、それ以外の同人はいたゞかぬことになつて居ります。

私は先生ではありません。たゞ經驗の上から、皆さんよりは少し先の道を知つてゐるので、その跡を見ていたゞくだけです。私は敎へるのでなく、步いた跡を報告するのです。この生活に入られ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

た方は、皆兄弟姉妹です。今は私が當番となつて道の上の御相談をおきゝして居るのです。皆さんも、やがて、當番をして貰はねばなりません。

『天香』といふ名について。この生活に入ると、名を變へねばならぬやうになりました。光名をつけねば判然せぬ場合があります。わたしは市太郎といふ名前なので『市さん』とか『市太郎』さんとか呼ばれると、矢張りその名に由る薫習が出て來る。前の生涯のつもりで話されます。『私は市太郎ではありません。天香です。市太郎といふ人間は死んだのです。』と、その頃は申したこともあります。かう云ふと、何か氣取つて居るやうに聞えるか知れませんが、その頃の私は、決して氣取つたり衒つたりしてゞはありません。本當に市太郎としての自分は死んで、天香として新しく生れた覺悟だつたのです。よく親戚の年寄りなぞは『天香さん』と呼んでおいて『何やらけつたいやな』なぞと言つたものです。けれども、一度『天香さん』と呼ぶと、もう『市さん』と呼ぶ時のやうな話が出來なくなる。これも私の新生涯にはやむを得ぬことだつたのです。

家内と長男についても、私は同じく道の人として扱ひたいのです。前の生活を捨てる時、家族も皆捨てました。そして一時離れ／＼になつたのです。私は天香として新しく生れました。程なく長男が來ました。が、私は養ひませぬ。獨り光に養はれます。かうなると長男は單なる私の息子ではなくなります。お連れの一人、おなじ道の同人です。私は『保太郎さん』と呼びます。長男は私を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

『天香さん』と申します。家内も同じです。維摩經に『法喜以爲妻』といふ言葉があります。此の言葉を借りて、私は法の喜びのお連れといふ程の意味で、法喜とよんで居ります。

かうした私共の生活には、世のいろ〳〵な批難もありますが、これより仕方がないのです。呼ばれるまゝにいろ〳〵の處へ寄せて貰ひます。それは維摩心です。維摩經には國王になり、或は商人になり、或は婬女となり、飮食藥草となるとも說かれてあります。米や麥が食はれて奉仕をする、それも摩維心であります。『供事を須る者のために童僕となり、旣にその心を悅かせしめて、求むる處に從つて佛道に入らしむる』とも說かれてあります。圓の同人が男衆やお女中さんと同じ形の托鉢をしてゐるのは、全く此の通りであります。維摩經は此の生活から離されぬお經です。何千年かの昔に此の生活を敎へ調べておいてくれたことを思ふと本當に有難いことです。日本では聖德太子は最も維摩經を喜ばれたお一人であります。太子の生涯はそのまゝ維摩經とも見えます。『和國の敎主聖德皇、廣大恩德謝し難し』と、太子を限りなく尊崇讃嘆して居る親鸞上人は、出家者の中では、此の道を一番はつきり出された方です。太子と親鸞と一燈圓と、この三つはどうした關係にあるか。一燈圓は、丁度太子と親鸞の中間を行つて居るやうです。太子は僧行以外に出られ、親鸞は出家沙門の形です。太子のやうに表面に立たず、親鸞のやうに宗敎じみずに、不即不離にあるのが一燈圓であります。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

修行としては、本當はこゝへ集るのは變則です。私は初め甲家へ托鉢をして居る、お連れが來ると、そこを讓つて隣りの乙家へ行きます。またお連れが見えると、そこを讓つて次へ移りました。そして、めい〳〵そのお家へ泊らせていたゞきました。建物もなく、またいりもせなかつたのです。或る人が、せめて晩だけなと集つてお話をしてはとのことに、ここへ集るやうになつたのですが、これは變則です。ですから、ここへ歸るといふのは變です、此托鉢先きから來て托鉢先きへ歸るのです。なるべく此處へ賴らぬやうになつたら本當です。托鉢する家こそ本來は我が家であり、また道場であるのですから。（つゞく）

大正十三年八月十一日朝一燈園禪堂に於ける講話字戸筆記

○本號表紙題字は東寺三寶の隨一たる杲寶の御自筆『十種大願』中よりいたゞきました。

正平七年二月二十五日とあります、（今津洪嶽師珍藏）

十輪堂の松風を聴きて

安藤州一

洛西の太秦村に、自分の友達が新居を構へたので、一度尋ねたいと思ふて居た。然るに今度其家で詩會が開かれる事になつたので訪問するの好機を得た。小春日和の麗らかな中に、萩や鷄冠花の秋の色を織り出して居るのを見ながらこの新居の門をくゞつた。二階に上つて一碗の御茶を頂いた後、あまりに日和と景色が善いので、詩を作るより前に、四方の景色を眺めんとて、家の主人が先きに立ち、その邊を案内して呉れた。最後に往つたのが聖德太子に因緣厚い廣隆寺であつた。二人づれで門を通り、本堂の方に足を進めた。廣い庭に翠を凝した松が並び、萩の花が今をさかりと咲て居る。誰が掃除をしたのか、箒痕新たに庭面が淨められて居る。庭の景色を賞し乍ら進むと、自分の眼に留つた者がある。それは白いシャツに白のヅボンをつけた青年が、井戸から水を汲んで居るのであつた他の二人の友は、この青年に眼もかけず、たゞ庭上の風趣を賞して居た。されど自分には此青年が一種の光りを與へた。獨逸のマールブルグ派の哲學者は「與へられたる者は要求したる者なり」との信念を持て居たが、今この庭上で自分に與へられたる光りは、實は自分の要求したものであつた。要求を持たぬ二人の友には、この白シャツの青年は、全く無關係の人であつた從つて何等の光りも與へられはしない。自分は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

昨日「朝日新聞」をよんだ。その中の記事に西田天香さんが、太秦の廣隆寺で、瞑想生活に心を凝して居るとあつた。自分が此寺の門に入ると、西田さんは何處で坐禪をして居るのか知らん、居所が分るなら御尋ねしたいと思ふて居たこの自分の要求を持ち乍ら進む處に、白シャツの青年の水を汲む姿が映つたのである。この時自分の心に與へられたる光りは、實に自分の要求して居たものであつた。

　青年は水を汲んで西側の小さい家に入た。自分は他の二友と共に本堂の出に進んだ。椽の上では五十歳位の疎髯のある御出家が、紫苑の花を心にして、種々の秋草をつかんで佛前にさゝぐる花をさして居た。一人の友が言ふには、あの人が東寺の濟世病院に盡力して居る御方であると。本堂の裏面に回つて、今春の御遠忌記念に出來た公園を見た。それから踵を回らして、再ひ本堂の前に出て來た。さきに青年の入つた家を見ると、北側の壁に、二三本の箒と塵取とが並んで居た。自分の心の中では、此處こそ西田さんの坐禪家に相違ないと思ふた。他の二友に向つて、私は一寸此中に用事があるから、詩會は先きに開て居て下さい、韻も私のを取て居て下さいと頼んで、此家の前から別れて仕まつた家の前の柱には、十輪堂といふ古い札が懸つて居た。戸口をはいつて案内を乞ふと、先きの白シャツの青年が出て來た。この中に西田さんが御坐るのですかと聞くと、實は今朝大阪の招きに應じて參られましたので、今晩か明日位に御歸りでせうと。西田さんが居らねば、自分は語る相手もない、しかし何だか立ち去るに忍びなかつた。そこで其青年に向つて話しかけた。青年の語るには、私は岩手縣の者ですが、一燈園に參りまして、もう一年半位になりますと。此人は頗る血色もよく、筋肉も緊して居るので、御入園の動機は、何か病氣でもあつての事かと聞くと、病氣などは全く無かつたが、たゞ精神生活を味ふために入園したとの事であつた。自分は自から進んで椽に腰を下し、尚も此青年に向つて話しを續けた、簷の外には、澄み渡つた

松風の音が響いて居る。

私は西田さんに逢はれないので、自分の思ふままを貴君まで話しますと前提して話しを進めた。實は昨日の新聞に「今までは諸方から招かれて托鉢をして居たが、それから少し形式をかへて、園員が一緒に二時間づつ働らかせて貰ふて執着をさける事を努めます」との園員の話しが出て居た。しかし私が思ふに、なるほど招かれた家に赴き、そこで托鉢をすると、居心地がよい家には、長く居る氣分にもなつて、自然執着の心も起り、居心地の悪い家では、腹も立ち不平も出るでせう。しかし私は、從來の托鉢が、その形式に於て悪いとは思はれぬ。新聞の記事だけを見て、直ちに園の内容をかれこれ言ふのではない、また園員の話しにしても、いよいよ形式改造と決定したと言ふのではない、只かようにもしたならば、執着を去るに少しは便利であらうと言ふまでの事である。しかし今私しが話すのは、かりに二時間位一處に働くとして、それに對する意見である。泳ぎを稽古する人が水の中では沈沒する恐れがあるから、疊の上で稽古をするとした時には、沈沒の恐れはない代りに、水泳も上達することは出來ぬ二時間一處に働くとすれば、一處に働いて一處に引上るから、執着の少なくなる代りに、眞に自分の執着心を取り去ることは出來ぬ。一軒の家で女中は見出せぬ、病人は遠慮なく病氣が進むどうどうして居ると、一家みな病人になるかも知れぬと言ふ時に、園の人の托鉢で、其家の苦痛が救はれたと言ふ時は、同時に托鉢者も救はれたのである。世の中の種々の喜びもありますが、人の患難を救ひ出した喜びは、また一種崇高なるものである。釋尊が看病を第一福田と言はれたのは、これがためである。眞の懺悔の生活は、單に心で懺悔するのみでなくて、それを實行に表はし、人の患難を救ひ得て、自分の徳とせぬ所に眞實の徳も顯はれ、眞實の懺悔も出來るのである。故に一燈園の托鉢は、その形式を變るよりも、この托鉢に對する其人の氣が大切であるその點なら今一層の注意も訓錬も必要であると

思ふと。その時その青年は、全く私も同感でありますと言はれた。

臺所の方で、煮物のこげつくやうな音がするので、私の方は構はずに、臺所を見て下さいと言ふと、青年は、いや大丈夫です、まだ煮へませぬと言ひ乍ら臺所に去つた。暫時にしてまた自分の前に出て來た。此家では、御飯も御菜も一つ土鍋で煮ますから、仲々時間がかゝります。そして此椽は、西田さんの御寢みになる所ですと、自分の腰かけて居た椽の西の方を指した、先生は御婦人方には、疊の上に坐つて貰ひますが御自身が御寢みになる時は、此椽の上に身を横たへられますとの事であつた。こんな處にも、西田さんの苦心の修行と、僞はりのない生活が表はれて居る。詩會の方が後れるので、そこ〳〵に此處を辭し去つた、心地のよい松風が、人の禪心をさそうが如くに吹て居る。萩の花の底には、ひるの間であへ蟲の聲が湧て居る。急いで詩會の席上に歸ると、韻は十一尤が當て居る。二首の五律を作つて席上の責めを塞いだが、まだ詩心が湧き出てゝ、何物かを創作せねば、自分の心が收まらぬ心地がした。終に十輪堂の壁に題すると云ふ詩が出來た。

題十輪堂壁

禪心澄徹一燈秋。磨去强剛能作柔。松下敲門人不答。十輪堂外夕陽幽。

（次號完結）

◇鹿ケ谷より

（十四頁よりつゞく）

朝晩十四回に亘つてのお話は天香さんには隨分御苦勞なことでして宇戸つる枝さんに筆記して貰ひました。集り中、天香さんは毎晩園に泊られ朝晩話の後、來客や同人に會はれました。新舞鶴の西村直さん寺田村の福森良次郎さんは會期中在園托鉢されました。

十七日はみな托鉢を休み、自由に休養させていただくことにして、此のお盆の集りを終りました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

鹿ケ谷より

れんしや

一燈園の年中行事の一つのやうになつてゐるお盆の集りを、今年は少し模様を變へて見ました。例年は八月十六日に、同人や托鉢先きの方に集つていたゞいて、同人達の祖先並に有緣無緣三界萬靈の廻向をし、一晩を共に話し合ふ慣はしでありましたが、もう少し意義あるものにしたいといふ皆さんの御意見で、先づ試みに變へて見ました。

八月十日より十六日まで一週間、毎日朝は六時半より、夜は七時より、一燈園の禪堂でお勤めのあと一時間位づゝ、托鉢生活に關するお話を天香さんにしていたゞくことにして、托鉢先きの方に御案内いたしました。

八月十日朝

五時起床、五時半よりお勤め（心經、舍利禮文大悲神呪、維摩經偈）

演題『一燈園生活とは何ぞや』

同人　約四十人

來客　十八餘

十日夜

七時お勤め（同上、以下同斷）

演題『懺悔の生活と他の宗教及び物質運動との關係』

同人　同上

來客　約三十人

十一日朝

『發　心』

同人　約四十人

來客　數　人

十一日夜

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

『光とは何ぞや』
同人四十七人内（男二十六人 女二十一人）
來客十一人　内（男六人 女五人）

十二日朝
『一燈園の家風』
同人五十人　内（男三十一人 女十九人）
來客六人　内（男五人 女一人）

十二日夜
『一燈園の家風』續き
同人五十人　内（男三十一人 女十九人）
來客十七人　内（男十三人 女四人）

十三日朝
『一燈園の家風』續
同人五十人　内（男三十一人 女十九人）
來客六人　内（男三人 女三人）

十三日夜
『出　家』
同人五十人　内（男三十一人 女十九人）
來客十五人　内（男九人 女六人）

十四日朝
『托　鉢』
同人五十一人内（男三十一人 女二十人）
來客五人　内（男三人 女二人）

十四日夜
『二種の功德』
同人五十三人内（男三十三人 女二十人）
來客十四人　内（男九人 女五人）

府下富野の庄し小森さん御父子、會期中在園托鉢のためお見えになる。來客の川北五郞さん一週間程在園托鉢修行の御希望なので、在園していたゞくことにしました。

十五日朝
『二種の功德』續
同人五十二人内（男三十四人 女十八人）
來客七人　内（男五人 女二人）

十六日はお盆の當日なので、皆が一緒に何處が適當な處へ托鉢しては如何かとの案が天香さんから出まして、お盆供養として結構なことなので、其の樣に決めさせていたゞき、二三候補地をあげられた中から大學病院を選びました。お

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

使に私が大學へ行ました。戸出先生の御紹介で事務の方にお會ひしましたが、合憎日曜のため事務官もその係主任の方も居られぬため、お願ひをきいていたゞけませんでした。第二案として、五人程を一組として、鹿ケ谷町及附近の社寺等に托鉢させていたゞくことにしました。法然院さん、靈鑑寺さん、谷口さんはそれ〲御快諾下さいました。

十五日夜

『學庭ぐるみの托鉢』

同人五十五人内（男三十五人 女二十人）

客來十二人　内（男九人 女三人）

十六日朝

『一燈園より見たる戀愛問題』

同人五十七人内（男三十五人 女二十二人）

來客　七人　内（男 女 七人）

天香さんのお話が濟むと直ぐ、昨日定めておいたやうに、左記の割當てで托鉢に出ました。來客の今村正雄さんも御希望されたので、托鉢に行つていたゞきました。

法然院（相武次郎、住田蓮車、吉井磯子等十四人）

靈鑑寺（木暮侶乘、金孟鎭等六人）

谷口さん（石原等等七人）

大豐神社（山崎壽、草場俊男等七人）

岡崎神社（植松無庵等六人）

園　托（天香師、當番八田勝三、典座丸山次先、宇戸つる枝等九人）

其　他（九人、休まれぬ托鉢先き）

天香さんは、法然院へ病中の方丈さんのお見舞がてら來られて午前中二時間餘の廊下の掃除等の托鉢をたれました。此の日托鉢は本當に氣持のよい托鉢で、何の組の人も皆喜んでゐました。

十六日夜

『一燈園生活の一體貳相四用』

同人五十五人内（男三十五人 女二十人）

來客　九人　内（男六人 女三人）

今夜は花園の金川最勝さん御夫婦が、園ちやん裳ちやんをつれて來られました。（十一頁へ）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

東京一燈園のこと

名稱　東京一燈園

事務所　東京市本所區林町二丁目七十八番地

理想　萬人愛によつて結ばれ各人自由にその賦性を發揮し得る社會の實現。

祈願　不二の光明によりて新生し許されて生きむ。
諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。
懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。
即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

同人　本園の理想と祈願とに賛同し本園の清規に則つて奉仕生活に献身せんとするもの。但し入園には役員會の同意を要す。

事業　勞働者宿泊所　實費食堂　自由賣店　人事相談所　職業紹介　託兒所　夜學　圖書館　裁縫講習　講演會　慰安會　家庭慰問　文書刊行　勞働者供給農園

施設

働く者の家

場所　東京市本所區林町二丁目七十八番地
建坪、一七七坪二合五勺

事業　勞働者宿泊所（定員九十六名）光食堂
自由賣店人事相談所一燈夜學園
（圖書部附設）講演會（月二回第一第三水曜夜）慰安會（毎週日曜夜）家庭慰問（托鉢）

子供の家

場所　東京市本所區小泉町二十四番地、建坪四五坪

事業　託兒所　母姉會　講演會　家庭慰問（托鉢）裁縫講習

LL勞働協會

場所　東京市本所區林町二丁目七十八番地

事業　勞働者供給　勞働者の共濟錬磨

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

組織 本園に道場及び社會部を置く。

道場は同人修行を専らにして精進托鉢を奉行する所。

社會部は社會問題の究明と解決とに勉め社會施設の經營に當る。

役員

當番 同人の信頼により本園を預り又之れを代表す。一名。

現任者　松下吉衞

主事 道場及び社會部に主事一名づゝを置く。當番同人會に諮つて之れを推擧す。

現任者、道場主事、谷田部信量、社會部主事、松下吉衞。

主任 社會部各種事業毎に必要に應じて主任一名づゝを置く。當番同人會に諮つて之れを推擧す。

現任者、勞働者宿泊所主任　谷田部信量　LL勞働協會主任　龜井潤司　一燈學園主任　竹井彌七郎　同圖書部主任　福村寛次郎　光食堂主任　若栄正二郎　子供の家主任　竹原千代

會計 二人　當番同人會に諮つて推擧す。

現任者　松下吉衞　谷田部信量

役員會 例會　毎月一日　臨時會　隨時、當番之れを召集し座長を務む。園務はすべて役員會の議に附し全會一致にて決す。

同人會 毎月十五日　主事之れを召集し座長を務む。園務について懇談し同人相互の親和を圖り、必要に應じて宗教、勞働等に關する調査研究をなす。

供養 同人はその恵まれたるものをすべて神佛に捧げ必要に應じて本園より供養を受くべし。準則を暫定すること左の如し。

第一次費　一人一日の食費及び雜費八十錢

第二次費　家族關係、作務の種類等を考量して定む。

供養に關する事務は役員會の決議に本

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

づき會計之れを取扱ふ。教團外に生活する同人は必ずしも會計の取扱にあづかるを要せず。

清規　萬事敬虔を旨とすべし。
他の惡を咎めず自らが不德の罪を懺悔すべし。
作さずんば食はず。
常に世相の觀察と自己の反省とに勉め苟も怠慢あるべからず。
行うて餘力あれば則ち文を學ぶ。

沿革　大正十二年九月、關東地方大震災火の救護に奉仕せる一燈園同人をもつて創設。中桐確太郎、伊藤猛、藤井悌、西田天香、小此木忠七郎諸氏の添禱を得て松下吉衞氏の主唱する所。同年九月二十六日より青山明治神宮外苑集團バラック内に「子供の家」を開き、保育事業を中心に諸般の隣保事業に勉む。同十一月社會局内震災救護打合會調査連絡部の實務を擔任し「全東京集團バラック居住狀態調査表」「細民地區淺草町調査表」「救療機關病床調査表」等を編む。同月中旬より又東京市社會局の依賴を受け六ケ所の市直營集團バラックの管理に當る。大正十三年一月內務省より簡易宿泊所託兒所の經營を委託さる。宿泊所は八月三十日より、託兒所は八月一日より開設。又四月より東京府社會事業協會調査連絡部の實務を擔當す。九月一日、事務所を現在地に開く。

補助金　一金三萬三百八十八圓八十錢也　內務省よりの簡易宿泊所建設經營補助資金外に米材木六百拾五石
一金四千百圓也　內務省よりの託兒所設備改善乃經營費外に米材木百廿五石
一金五千圓也　大震災善後會よりの社會事業補助金
一金壹千圓也　內務省よりの補助金

顧問　西田天香　中桐確太郎　小此木忠七郎

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

吉田暎二第一戯曲集

疲れた家

定價貳圓五拾錢
紙數三百三十頁
裝幀美本箱入

内容
疲れた家　兎と龜
道化　父

此處に納めた四篇は皆自分の習作に外ならないけれども、自分にとつてはどうにもならない問題のみを取扱つたものだ。『道化』では、「藝」と「家」、『父』では「家」と「道」との間の關係を取扱つた。「藝」に入るには、又「道」を修めるには、はたして「家」から出、家を捨てなくてはならないだらうか。それが正しいだらうか。自分にとつては可也大きな問題である。又「疲れた家」では現在の日本の中產階級のだらけきつた姿、無爲と困憊の內にしぼんで行くすがたを、比較的客觀的な立場から見つめさせて貰つた。いづれも藝術としては未熟ではあるだらうけれど、自分として取る態度と立場は今後と雖もこの小さな戯曲集より外へ出る事はないであらう。（著者）

發行所　東京市小石川區第六天町二四　段丘社　振替東京六四六七九番
發賣所　東京市日本橋區元柳町十　青々堂書店　振替東京四一八八三番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN